

藤原俊成の私家集書写活動

夫

田中 登

はじめに

藤原定家が精力的に私家集を書写していたことは、今日の国文学界では、ほぼ常識的な事柄に属しているといつて差支えなからうが、その書写のあり方について、冷泉家に伝わる数多くの定家本を調査した片桐洋一氏は、

(1) 全丁を定家自身が書写したもの。

(2) 一部分を定家みずからが書写し、残りを周辺の人に書写させて

校閲加筆したもの。

(3) 全体を周辺の人に書写させたのちに校閲加筆したもの。

に大別した上で、いずれも定家の監督下に書写されたものであるゆえに、総じて定家書写本と称してよい、と述べている。¹⁾

では、定家の父俊成の場合はどうであろうか。従来俊成の私家集書写活動については、あまり注目されてもこなかったのであるが、

冷泉家の私家集が影印叢書という形で続々と紹介されるに及んで、俊成も、定家ほどではないにしても、かなり積極的に私家集を書写していたことが明らかになってきた。そこで、以下、本稿では、冷泉家以外の本をも含めて、できるかぎり俊成の私家集書写活動の実態を明らかにしてみたいと思う。

1 興風集 4の清正集と合綴されており、一連の坊門局筆三十六人集の内の一。団家の所蔵で、早くに複製本が出ている。²⁾ 卷末には定家の「不入興風元方卅六人／弁知歌道之人所撰賦／仲文之交衆不知其故／云古云今撰此事之／菴皆是道之魔界／賦」という譚語があるが、本文自体に俊成の加筆は認められない。

2 兼輔中納言集 一連の坊門局筆三十六人集の一。冷泉家時雨亭文庫の所蔵で、『平安私家集三』に影印がある。³⁾ 外題の「堤中納言集」は定家様の筆跡で、本文の加筆は、三丁表10行目「のふゆみ」

の「ふ」を見せ消ちにし、「リ」と片仮名で訂正したのを始め、同じく11行目「とひけれど」の「ひ」の右傍に「ヲ歟」と書入れたのや、四丁裏4行目「つきたえたに」の「た」と「え」の間に「ル」と記したり（巻末の図版1参照）、八丁表11行目「おやのもとへ」の「へ」を見せ消ちにし、「二」と訂正したのが、俊成の所為であろう。なお、御家切・了佐切・昭和切・中務集・山家心中集・広田社歌合・古来風体抄など、俊成が書写ないし加筆した典籍には、しばしば片仮名の書入れが見られるので、ここでも、片仮名書きの訂正を俊成筆の指標とした。

3 中務集 伝西行筆。出光美術館の所蔵で、早く尊経閣叢刊の一として複製本が出ている。内題「なかつかさかしふ」は俊成筆（参考図版2参照）。本文の加筆も、六丁裏11行目「しのはむ」の「し」と「の」の間に記された「カ」、七丁表4行目「むかみの」の「む」と「か」の間に記された「ラ」など、その他数箇所が俊成筆と認められる。本文自体は側近の筆で、A・B二筆よりなる。

4 清正集 1の興風集と合綴されており、一連の坊門局筆三十六人集の内の一。坊門局が書いた内題「きよまさ」の「まさ」を「タ」と訂正したのは俊成（図版3参照）。本文も、判読しづらい六丁表8行目「としにそありける」の「そ」に「ソ」と加筆したの俊成であろう。

5 元真集（加賀切） 伝俊成筆。前田家伝来の本を大正十五年に分割、加賀切と命名されたが、その際複製本が作られている。外題「元真集」は定家の筆。本文は俊成とは認められないが、三九丁裏11行目「人のくにな」の最後の二文字を墨で消し、「ルニ」と訂正したのは俊成であろう（図版4参照）。

6 源順集 一連の坊門局筆三十六人集の内の一。冷泉家時雨亭文庫の所蔵で、『平安私家集三』に影印がある。外題「源順集」は定家様で定家の側近の手になる可能性が高いが、内題「続小草内和歌 源順」は定家の筆。本文は三九丁裏3〜4行目「天六よりといふとしはしきりテミとせ秋のなかはなる…」の「し」と「は」の間に「ヨリ」と書入れたのは俊成であろう（図版5参照）。

7 元輔集 尊経閣文庫の所蔵で、尊経閣叢刊の一として複製本が出ている。内題「もとすけかしふ」は俊成筆（図版6参照）。識語「よにわろきはんなり、すくなし」も俊成筆か。本文はA・B二筆に分かれ、冒頭のA筆は俊成。

8 元輔集 一連の坊門局筆三十六人集の内の一。冷泉家時雨亭文庫の所蔵で、『平安私家集三』に影印がある。外題「元輔集」は定家様。本文に俊成の加筆は認められないが、巻末に坊門局の筆で「承安五年五月廿四日、さい宮のおはします四条まちのこうし□みなみおもてのひむかしのつまとにてかきはてるを…」という

奥書が記されている。ちなみに承安五年（一一七五）時点で坊門局は三十代後半、俊成は六十二歳、定家は十四歳という年齢関係になっている。

9 平兼盛集 一連の坊門局筆の三十六人集の内の一。冷泉家時雨亭文庫の所蔵で、『平安私家集三』に影印がある。外題「平兼盛集」は定家筆か。本文は八丁裏2行目「あふことの」の「の」を見せ消ちにし「ヲ」と訂正を施したのは俊成であろう（図版7参照）。

10 能宜集 一連の坊門局筆の三十六人集の内の一。冷泉家時雨亭文庫の所蔵で、『平安私家集三』に影印がある。本文は一六丁裏14行目「あきはせへまてはへに」の「へ」と「に」の間に「ル」と記したのや、一九丁表13行目「こたへたにせぬ」の「たに」を見せ消ちにし「サル」と訂正し、さらに「せぬ」の左傍に「ラム」と書入れた（図版8参照）のなどを始め、その他若干俊成の加筆が認められる。

11 源重之集 一連の坊門局筆三十六人集の内の一。冷泉家時雨亭文庫の所蔵で、『平安私家集三』に影印がある。外題「源重之集」は定家筆。本文は二〇丁表3行目「さはらさらまし」の「らまし」を見せ消ちにし、「リケリ」と訂正したのは俊成の筆（図版9参照）。

12 小大君集 冷泉家時雨亭文庫の所蔵で、『平安私家集二』に影印

がある。冒頭部を欠くも、断簡が二葉伝西行筆として現存。外題「小大君集」は定家筆か。本文は3中務集のA筆と同筆。巻末余白部に後人の筆で「五条入道殿筆跡」とあるのによれば、内題や本文の冒頭部は、あるいは俊成の筆であったかと思われる。

13 周防内侍集 冷泉家時雨亭文庫の所蔵で、『平安私家集一』に影印がある。他筆を交えず全丁俊成の筆（図版10参照）。

14 俊忠集 冷泉家時雨亭文庫所蔵の卷子本手鑑に貼られた横長冊子本の断簡は表紙部分で、「ことのゝの御しふ」とあるが、これは俊成の筆。続くツレの一葉は巻末の余白部で鎌倉後期あたりの筆（為相筆という）で「二条帥殿御集也外題并奥二枚ハ五条殿御筆也」とある。これによれば、もと横長冊子本に書写された俊忠集があり、それは外題と最後の二丁を俊成が書写していたことになり、「ことのゝ御しふ」と記した断簡が即ち外題部分であり、同じく冷泉家に蔵されている三筆の掛軸の内、俊成筆の「山ふかみ」の色紙（といっても正確には色紙の形に切った断簡。図版11参照）が、俊忠集の歌の位置からしても、「奥二枚」の部分に該当するのであろう。なお、諸家に分蔵されている伝西行筆小色紙と呼ばれる断簡は、料紙の大きさといひ、歌の内容といひ、このもと横長の冊子本から切り取られたものと思われる。

15 六条院宣旨集 冷泉家時雨亭文庫の所蔵で、『平安私家集二』に影印がある。外題「六条院宣旨集」は定家筆。内題の「六条院のせんしの集」は俊成の筆（図版12参照）。本文は側近の書写になるもので、俊成の加筆は特に認められない。

16 中御門大納言集 冷泉家時雨亭文庫の所蔵で、『中世私家集一』に影印がある。外題「中御門大納言殿集」は定家筆。本文はA・B・Cの三筆に分かれ、B筆は3中務集のA筆、12小大君集と同筆で、C筆は俊成（図版13参照）。

17 山家心中集 宮本家の所蔵で、複製本がある。内題「山家心中集花月集ともいふへし」は俊成の筆か。本文はA・B・Cの三筆に分かれ、A筆は3中務集のA筆、12小大君集、16中御門大納言集のB筆と同筆。本文は一丁裏2行目「おもひのとめて」の右傍に「ヤスウマチツ」と書入れたのや（図版14参照）、二丁表9行目「さらはおそれて」の判読しづらい「そ」の右傍に「ソ」と記したのなど、その他若干の片仮名の加筆が俊成の所為と認められる。

18 唯心房集 関戸家旧蔵。内題「唯心房集」とその下の作者勘注および識語「八条院坊門局下官大姉所書写也」は定家の筆。この識語によって唯心房集が坊門局の真跡資料の基準となりうることが知られる。俊成の加筆は12番歌「つねならぬよのことはりをおも

はずは……」の右傍に「よのなかをつねなきものと」と珍しく平仮名で書入れたのが、それ（図版15参照）。

19 近衛大納言集 冷泉家時雨亭文庫の所蔵で、『中世私家集一』に影印がある。外題「近衛大納言集」は定家筆。内題「大納言実家卿集」「大納言実集下」は俊成筆（図版16参照）。本文は坊門局の書写になるものだが、一二丁裏7行目「やりす■す」の「す」と「す」の間の文字を墨で消し、「ク」と片仮名で書入れたのや、三四丁裏7行目「みありきはへりしに」の「り」の右傍に「ル」と訂正の筆を入れたのなど、所々に俊成の加筆が認められる。

20 三位中将公衡卿詠 冷泉家時雨亭文庫の所蔵で、『中世私家集四』に影印がある。外題「三位中将公衡卿詠也百字百題」「五時百首云々」および端書（図版17参照）・識語などは俊成筆。本文は3中務集のA筆、12小大君集、16中御門大納言集のB筆、17山家心中集のA筆と同筆。途中切りがあるが、その内の二葉が伝西行筆公衡集切として現存する。なお、ここに収められている公衡の二つの百首歌は建久元年（一一九〇）の作なので、文治五年（一一八九）に亡くなった西行の筆ではないことになる。

21 少輔入道百首 寂蓮の無題百首と呼ばれているもの。服部光一郎氏の所蔵で、平成十二年四月東京国立博物館の新指定国宝・重要

文化財特別展観に出品された。外題「少輸入道か百首」は俊成筆。

本文は坊門局筆とも寂蓮筆とも伝えるが、共に異筆。

22 少輸入道定長百首 寂蓮の結題百首と呼ばれているもの。宮内庁

書陵部の所蔵で、江戸期の写本ながら、識語部分は原本の書風を

模しており、「少輸入道定長百首とのゝむすびたいとそ もろて

むをかきいたすへし」は俊成筆（図版18参照）、「そのおりめてた

きうたときこえき いま見るにひとつもえりいてかたし 人の心

く也」は定家の手になるもの。

23 寂蓮守覚法親王五十首 本来は守覚法親王以下十七名の歌人によ

って詠まれた定数歌だが、俊成筆の断簡は現存するものいずれも

寂蓮の詠ばかりなので、21・22の百首歌にならって、便宜上ここ

でも私家集扱いとする。

俊成が書写に関与したと思われる私家集は管見に入るところ以上

の通りだが、その他、冷泉家蔵の伝西行筆未詳歌集^切（俊成の加筆

あり）や同じく冷泉家蔵の俊成筆六半形未詳家集^切、また近時上籙

彰次氏が紹介されて話題を呼んだ俊成自筆と伝える自撰家集^切など

も、あるいはここに入れるべきかもしれないが、伝西行筆の未詳歌

集切は未だ作品として成立する以前の草稿段階のものではたして私

家集かどうかも判然とせず、俊成筆六半形未詳家集切は私家集であ

らうと推測はされるものの、誰の家集かも分からないものであり、

俊成の自選家集切はそれが確かに俊成筆のものであれば、ここで問
題としているような「書写活動」とは、また自ずから概念が異なっ
てくるように思われるので、今しばらく除外して考えていることを
申し添えておきたい。

ま と め

右に挙げた二十三点の作品につき、俊成の係わり方によって分類
してみると、次のようになる。

(1) 全丁を俊成が書写したもの。

13 周防内侍集 23 寂蓮守覚法親王五十首（ただし、現存の

断簡の限りにおいて）

(2) 一部は俊成が書写し、後は側近の筆になるもの。

7 元輔集 12 小大君集（ただし推測による） 14 俊忠集

16 中御門大納言集 20 三位中将公衡卿詠

(3) 本文は側近の手になれども、外題や内題、あるいは識語を俊成

が認めたり、訂正の筆を加えたもの。

1 興風集 2 兼輔集 3 中務集 4 清正集 5 元真集 6

源順集 8 元輔集 9 平兼盛集 10 能宣集 11 源重之集

15 六条院宣旨集 17 山家心中集 18 唯心房集 19 近衛大納

(注1) 冷泉家時雨亭叢書17『平安私家集四』(朝日新聞社、平成八年)

(注2) 『清正集興風集』(倉田実、大正十一年)

(注3) 冷泉家時雨亭叢書16『平安私家集三』(朝日新聞社、平成七年)

(注4) 尊経閣叢書『中務集』(前田育徳財団、昭和十四年)

(注5) 『元真集』(古鏡社、昭和二年)

(注6) 尊経閣叢書『元輔集』(前田育徳財団、昭和十七年)

(注7) 冷泉家時雨亭叢書『平安私家集二』(朝日新聞社、平成六年)

(注8) 冷泉家時雨亭叢書『平安私家集一』(朝日新聞社、平成五年)

(注9) 冷泉家時雨亭叢書『拾遺愚草下』(朝日新聞社、平成七年)

所収。

(注10) 冷泉家時雨亭叢書『拾遺愚草下』(朝日新聞社、平成七年)

所収。

(注11) 冷泉家時雨亭叢書『中世私家集一』(朝日新聞社、平成六年)

(注12) 『山家心中集』(日本古典文学会、昭和四十六年)

(注13) 冷泉家時雨亭叢書『中世私家集四』(朝日新聞社、平成十二年)

(注14) 冷泉家時雨亭叢書『拾遺愚草下』(朝日新聞社、平成七年)

所収。

(注15) 冷泉家時雨亭叢書『拾遺愚草下』(朝日新聞社、平成七年)

所収。

(注16) 上篠彰次「藤原俊成自撰家集切考」(文林第三十三号、平成十一年)

十一年)

(注17) 全丁定家が書写した例としては、出光美術館蔵の四条中納言

集と諸家分蔵の高光集(ただし、現存の断簡の限りにおいて)ぐらいなものである。

付記 本稿は平成十二年四月の和歌文学会関西例会(於奈良女子大

学)において口頭発表したものに基づいている。発表当日有

益な御教示を賜った諸氏に謝意を表する次第である。また、

本稿は平成十一年度関西大学国内研究員としての研究成果の

一部であることも、ここに付け加えておきたい。

図版 1



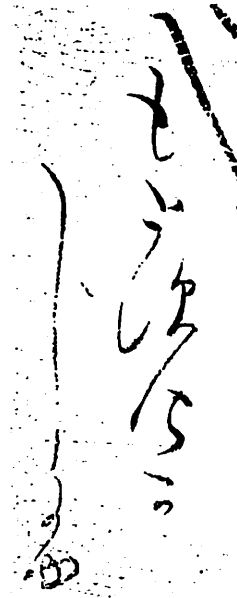
図版 5



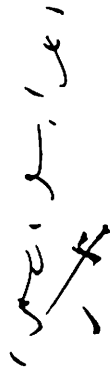
図版 2



図版 6



図版 3



図版 7



図版 4



図版 8



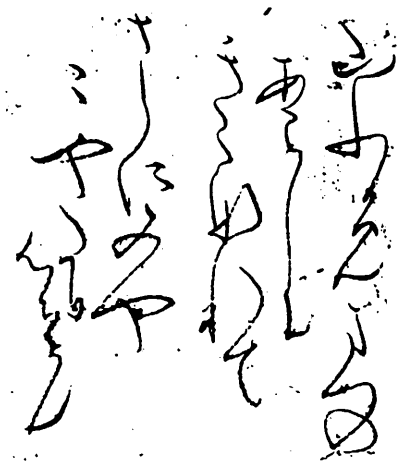
図版 9



図版 10



図版 11



図版 12



図版 13

のしるも
いふもあはれいふもあはれ
しるもあはれいふもあはれ
あはれいふもあはれいふもあはれ

図版 14

あはれいふもあはれいふもあはれ
あはれいふもあはれいふもあはれ
あはれいふもあはれいふもあはれ
あはれいふもあはれいふもあはれ

図版 15

あはれいふもあはれいふもあはれ
あはれいふもあはれいふもあはれ
あはれいふもあはれいふもあはれ
あはれいふもあはれいふもあはれ

図版 16

大由し 字家柳集

図版 17

賦百字和七月廿九日
春女 付坂守保

図版 18

あはれいふもあはれいふもあはれ
あはれいふもあはれいふもあはれ
あはれいふもあはれいふもあはれ
あはれいふもあはれいふもあはれ

(たなか のほる / 本学教授)